

い。……あゝ。段々此方へ出て来るがな……ア、困つたな是れは……俺しの姿を見せて遣るのは可哀相ぢや。と云ふて後戻りも出来ず……ア、難儀やなア。玄伯どん。成る可く道の端へ寄て、下され」道の脇へ寄て遣り過さふとしてお在なはる。番頭はそんな事御存じない。

「さア。誰れ彼れの用捨はせんぞ。掴まえたら肩拔がして踊らすのぢや……」

豪ひ勢ひでヒヨロ／＼遣て参ります。親旦那が右へ避けると右、左へ逃ると左へ、木の根に躓いて倒れかゝる機みに親旦那の肩へ手が掛りました。

「サア掴まえたぞ、掴まえたぞ。」

「ア、これ。人違ひぢや。／＼。」

「何吐し腐る。逃げよふとて逃がすかい。」

「いんや左様ぢや無い。……ア、痛いコレ……放して下され。」

「ヘン。そ、其手は桑名三日市やぞ……繁か。何奴や卑怯な事云やがんのは。今此扇子を除つて……面を檢分……ブツ。あ、貴方は旦那さん。」

「オ、次兵衛どん。」

「ウヘー。……親旦那様には御機娘宣しふみます。其後永々御無沙汰を致しまして申譯が御座りません。承りますればお店も追々御繁昌の趣き、お芽度ふ存じ上げます……」

「ウム。……ハイ……ハイ……ア、これ番頭どん何を云ふのぢやいな。アツハハハハ。……次兵衛どんコレ。そんな處へ座つたら着物に土が附くがナ……ウームもう堪忍してんか。老人に二輪加の相手をさすのは殺生ぢや。アハハハ……オ、こりやお連れの衆かいな。私處の大事の番頭さんぢや。どふぞ面白ふ遊ばして遣とくなされ。ア、併した。日暮れは烏渡小早ふ歸しとくなされや。夫れ丈け頼んどきます。……サア玄伯老往こか。ア、汗掻かしよつた。」

親旦那の方が却て汗ビツシヨリに成て、玄伯を連れて匆々とお歸りに成ります。

「サア次さん。陽氣に往きまよ。はア。ツツンツ。ンツンツ。」

「じや益しい。誰やい俺をこんな處へ上げたのは」

「何怒つてたはんね。今のお爺さん一熊誰だんね」

「誰れ處ろの騒ぎかい。あれが内の親旦那ぢやい。」

「まア、其様やつたら、船へ来て貰ふて一緒に飲んで貰ふたら能かつたのに……」

「阿呆ん陀羅。さア羽織出せ、早よ／＼。」

「まア慌て、どない仕なはんね。」

「どないも、こないも有るかい。直ぐに歸るね」

「そんな無茶な。あとの仕末わいな。」